

令和6年度(2024年度) 自己評価結果公表

社会福祉法人ふじみ野会
子どものその幼保連携型認定こども園

1. 本園の教育・保育目標

子どものその保育生活協同組合から61年余り積み重ねてきた保育実践をもとに、一人ひとりの子どもを大切に、自然のなかで友だちと感動を共有してあそび、子どもたちが人とつながり生きる力を育てることを念頭に保育実践を行う。

平成27年4月から幼稚園機能と保育園機能を併せ持つ幼保連携型認定こども園として一体的な教育・保育を行う。

【私たちの願い(教育保育理念)】

豊かな自然	自然の中でのびのびと子どもを育てます
あたたかな人間関係	おとなの愛情と仲間の中で子どもを育てます
本物の文化やあそび	豊かな文化やあそびの中で子どもを育てます
地域とともに	園と家庭・地域が一緒になって子どもを育てます

【私たちのめざす子ども像(教育保育目標)】

- 友だちと思いきりあそび、自分の気持ちを素直に表現でき、人とつながって生きていく子ども
- 何にでも興味・関心を持ち、自分でやってみようとする子ども
- 失敗を恐れないで挑戦し、仲間とともに学び、その経験を生かす子ども
- あそびの中でからだを動かす楽しさがわかる子ども
- 生活習慣を身につけ、健康な生活ができる子ども

【重点目標】

- 幼保連携の特色を生かした保育・教育内容の構築に努める。
- 乳児期はあたたかい人間関係の中で安心して過ごし、自我の芽生えを大切にする。
- 幼児期は、大人の愛情を受け、自然の中で仲間と交わりのびのび遊ぶ中で自己肯定感を育てる。
- 友だちと力を合わせて活動に取り組み、話し合い活動を行っていく中で、自分で考えて、主体的に行動する力を育てる。
- 幼児中心の子育て支援の取り組み(うさぎの広場)だけでなく、乳児を中心とした子育て支援(赤ちゃんのつどい) 更にプレ保育の残り組みを始め、地域の未就園児とその保護者を支えていく。

3. 評価項目の取り組み状況

評価項目	取組み状況
教育・保育内容について	乳児担当の職員は、チームワーク良く子どもたちの日々の成長を丁寧に見ていった。0歳児クラスでは、高月齢の子が1～3月生まれの低月齢の子に気持ちを寄せていく姿と子ども同士の気持ちの交流があり、乳児期の友だちとのかかわりやつながりの芽生えを実感した。 異年齢の交流も出来るようになり、お互いに交流をする事で、年長組へのあこがれの気持ちや小さい子どもへの優しい気持ちが育ってきている。 どの年度も担任の先生たちは、子ども達とたくさんスキンシップを取り、肌と肌との触れ合いあそびを大切にしてきた。また、担任だけではなく、フリーの先生、バスの運転手、夕方の先生、給食室、事務所の職員と、職員全員で子ども達にたくさんの愛情を注いで保育を行ってきた。 子ども達は、豊かな自然環境の中で、体いっぱい自然を感じ、生き物との触れ合いの中で、五感を使う経験をたくさん行ってきた。そして、大人が押し付ける保育ではなく、子ども達が自分で考えて行動する『主体性』を大事にする保育を行ってきた。なによりも、先生や友達とたくさんあそび、たくさん泣き、たくさんケンカをしてきた中で、「自分が大好き」「先生大好き」「友だち大好き」といった思いが育っていった。年長組の子ども達は、子どものその「私たちのめざす子ども像」に近い姿で卒園する事が出来るのではないかと思います。
教育・保育内容の保護者への周知	毎月、各クラスや各年度で作るカリキュラムで、子どもの姿やその月に取り組む全体的な保育内容を伝えてきた。また、日々のクラスや子どもの活動の様子もクラス新聞で伝えてきた。 クラス会を年間通して行い、園の方針を伝え、なおかつ、保護者の話を聞いたりする事が出来た。また、希望者には7月～8月に個人面談も行い、保護者の悩みなどを聞きながら支援を行ってきた。 夏まつりでは、今年も地域の方や卒園生を呼んでの夏まつりを行った。昨年は、保護者の方の手伝いを最小限にして行っていたが、今年は、クラス事に「夏まつり実行委員」を選出してもらい、より、以前のその行っていた「保護者と職員が力を合わせて行う夏まつり」を行う事が出来た。また、たくさんの卒園児も参加してくれ、卒園生にとって「そのはわがふるさと」という事を再認識する夏まつりになった。 運動会は、今年は4年ぶりに全園児の運動会を行う事が出来た。また、運動会開始時間を30分早めた事で、保護者競技の、お父さん綱引き、お母さん縄跳び、クラス対抗リレーも午前中に行え、そのが大切にしてきた「大人も一緒に楽しむ運動会」を行う事が出来た。 親子そのまつりでは、今年も各クラスから「親子そのまつり実行委員」を選出して行った。保護者中心で行う事により、そのが大切にしている保護者同士のつながりが持てる切っ掛けにもなった。子ども達も、親子で伝承あそびを楽しめた事により、よりあそびの幅が広がったのではないかと思います。 保護者の有志による人形劇サークルによる人形劇公演が年に2回行われる。そのでは、年長組の12月に表現活動として子ども達が自分達で作った人形で、人形劇を演じる。日頃の絵本の読み聞かせや絵本の貸し出しを通して、様々な絵本に出会い、また、小さい時からのごっこあそびを楽しむ中で、人形劇の文化が根付いてい

	っている。今年度は、らいおん組は、「めっきらもつきらどおんどん」ぞう組は「3びきのやぎのがらがらどん」きりん組は「ねずみのすもう」を行った。 その他、「山登り」「合宿」「野外保育」なども行った。また、保育参観、お父さん参観、作品展等、保護者を呼んでの行事を行った事で、子どものへの関わり方や園の保育について理解してもらった切っ掛けになった。 3～5歳児の保護者対象の「合同クラス会」や、外部講師を呼んでの「ひだまり講演会」も行い、参加された保護者に、園の方針や子育てにとって大切な事、絵本の大切さを伝える事が出来た。
給食と食育	多様な食物アレルギーに対応する中、ヒヤリとする場面を無くするためアレルギーカードの記入式を今年度も行った。 給食室側と保育側の双方が記入し互いにチェックすることでミスは大きく減ったが、それでも数回のミスがあり、その都度、職員でミスが起きた原因や今後の対応策について話し合ってきた。毎月の夜会議では、必ず各クラスの報告の中に、「給食について」を報告し、保育現場との意見を交流し、メニューの改善も行った。 旬の食材の枝豆やトウモロコシなどの皮むきなどをクラス単位で体験させることが出来た。また、竹の子ご飯の前に、竹の子を見る、年長組は給食室見学を行う等、給食室と連携しながら食育の取り組みを行ってきた。 年長組は、自分たちで野菜を育て、収穫し、調理をする事で、野菜が出来るまでの過程を知るなど食育の取り組みも行った。野菜が苦手な子どもが、自分たちの収穫した野菜なら食べられる姿も見受けられた。また、他の年度でも野菜栽培を取り組むクラスがあった。
教職員同士の協力・連携	幼保連携を進めるため今年度も幼児クラスは幼稚部・保育部の担任が合同で話し合う年度別会議をできるだけ週1回行うようにした。その中でそれぞれの子どもに配慮する場面や幼保一緒に保育する場面など、認定こども園ならではの特徴と留意すべき点を話し合い、互いの理解を深めていった。若い職員にとって、年度別会議は少人数で自分の悩みを出しやすくアドバイスをもらえる機会であり、色々な事を学べたという声が多くあった。 乳児クラスでも、複数担任なので、週1回はクラス会議を行う事で、保育内容の確認や週の見通しなどの話し合いを重ねてきた。 職員数の多い認定こども園なので、保育現場だけでなく、給食室、事務所、バスなどの運行管理にかかわるさまざまな職員の意見が反映できるように、合同年度担当会議や、行事の担当者会議などを開くようにした。また、アプリを通して、園で決まった事や考えなどを随時、全職員に周知していった。
研修・研究の充実	文化学校や保育プラザ、オンライン研修など様々な研修に参加し、保育の質を高め、それぞれが学んだことを日々の保育に生かしている。また、中堅職員を中心としたキャリアアップ研修では、マネジメントや保護者支援などで各園の情報に触れ新たな学びとなっている。また、外部講師を園に呼んで、絵本の勉強会の取り組みも行った。その他、年度初めに「年間個人目標」を決め、半年、1年と振り返ってもらい、仕事の意識を高める取り組みを行った。 職員には年に1回、実践記録も書いてもらい、学期の最後の月の夜会議で、それぞれの実践記録について話し合ってきた。

	その他にも、食物アレルギーの子どもが増えている現実がある中、職員会議などで、アレルギーの多様性を管理栄養士から学ぶ取り組みを行った。
健康・安全・衛生管理への配慮	健康・衛生管理面では、新型コロナウイルスが5類になった後も、うがいと手を洗う習慣を引き続き図った。 インフルエンザが流行した時期は、園児の欠席者も多かったが、学級閉鎖を行うほど流行しなかったのは、日ごろの手洗い、うがいの効果があったのではなかとされる。 水害訓練を年1回、避難訓練は毎月行った。避難訓練は、毎回同じ時間で行うのではなく、朝の自由時間、昼寝後、夕方の時間等様々な時間帯で行った。子ども達は、回数を重ねる事に動きもスムーズに対応出来るようになった。 不審者対応として、夕方には男性職員が時間を決めて、園外を見回り、不審者対応を引き続き行ってきた。
保護者、地域との連携と支援	昨年度もプレ保育を行った。(親子ブレは、2歳児の親子に決まった曜日に子どものそのに来てもらい、月に2～3回一緒に遊んだり、制作をしたり、自然に触れたりしながら給食も親子で食べてもらう取り組みである。)地域子育て支援事業としての「うさぎの広場」「赤ちゃんのつどい」も昨年度同様、月1回のペースで行ってきた。子育てが初めてのお母さんたちの悩みを聞いて助言をしたり、赤ちゃんの接し方やあそびを体験してもらう取り組みである。回数を重ねるごとに親同士、あるいは親と職員が気軽に話し合える場になった。 幼稚園部、保育部の年少組以上のクラスから、運営サポート委員を選出し、お父さん達が主体的に活動を行う「運営サポート委員」の活動を今年度も行った。「お父さんとあそぼう委員」「卒園生事業委員」「そのだより委員」の3つに分かれており、それぞれの活動を行った。 6月に行った「運営サポート委員主催 春のキャンプ」では、年中、年長組の希望者が参加。家族でキャンプを楽しみ、他の家族との交流を深める事が出来た。また、11月に行った「お父さんとあそぼう山登り」も紅葉が綺麗な中、親子で山登りを楽しんでいた。1月の「お父さんとあそぼう冬のあそび」では、親子で凧あげやコマ大会やカルタを楽しんだ。 メリーの会(卒園生活動委員会)主催の行事は、11月にみかん狩りを行う予定だったが、みかんが病気になってしまい、急遽、官ノ倉山のハイキングに変更したが、卒園した子ども達が久しぶりに友だちと再会し、楽しそうに山を登っていた。 そのだより委員会では、年に2回、「そのだより」を発行し、在園の保護者に「運営サポート委員」の取り組みを理解する切っ掛けになった。 ホームページは園を広く知ってもらい地域の方とつながる大切なツールなので、今年度も、更新をできるだけ行うようにした。「赤ちゃんのつどい」や「うさぎの広場」の情報、園の見学会などのお知らせも載せるように心がけた。また、インスタグラムもこまめに更新をしていった。

4、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
幼保連携型認定こども園としての教育・保育の推進	乳児クラスが2階にあるため、乳児の日常の姿が伝わりにくい面がある。乳児の安定した生活を守りつつ、幼児クラスとの交流をいろいろな場面で広げていく。 幼児の年度別会議はほぼ週1回行っているが、乳児のクラス会議は不定期だったので、会議中の見守り体制を整え、幼児の年度別会議同様に週1回は行えるようにして、日常の保育の振り返りを大切にしていく。
教職員の資質向上	子ども理解を深めるために、広い視野を持ち、さらに積極的に研修研究活動に取り組めるようにしていきたい。、外部研修や講師を招いての研修を今年も取り組んでいきたい。 3年前から行っている「今年の目標」「スキルアップする為に行いたい事」の2つを今年度も書いてもらう。そして、半年、1年ごとに、自分の目標とスキルアップする為に行いたい事に対して振り返ってもらいながら、保育の質を高める取り組みを行っていく。
子育て支援の取り組みの充実	専任の職員を配置し、「うさぎの広場」「赤ちゃんのつどい」の内容をリフレッシュして、子育てを楽しめる雰囲気を作っていく。 また、プレ保育を火曜日、木曜日、金曜日クラスで行い、未就園児とその保護者の支援をより積極的に行っていく。 保護者同士の交流、仲間づくりを目指し、地域に開かれた園として取り組む。
食育の推進	職員室の職員に、乳児クラスだけでなく幼児クラスの子どもたちの給食時間の様子を時々見に来てもらい、メニューや食材の話をしてもらい、食への興味関心を広げる。 子ども達に、枝豆やそら豆をむぐのを手伝ってもらったり、給食の時に、竹の子を見たり触ったりしながら、本物の食材に触れる機会を増やす。 年長組は、なすやきゅうり、ミニトマトなどの野菜栽培を行う事で、野菜が育つ過程を学んでいく。また、給食室見学を行い、自分たちが食べている給食がどのように作られているのかを知る。
保護者参加	昨年同様、「子どものその運営サポート委員」の活動で、山登りやキャンプ、冬の遊びを楽しむ。職員と一緒に子ども達の為に、協力して行っていく中で、父親の子育てへの参加を図る。また、「卒園生事業」での取り組みで、山登りなどのイベントを行い、卒園児や保護者との交流を図る。 今年度も、夏まつり、親子そのまつり、保育参観保護者同士の親睦を深める。また、外部講師を呼んで、「絵本の講演会」を行う事で、保護者の子育てのサポートを行う。

以上の通り報告します。

令和7年（2025年）3月31日
 子どものその幼保連携型認定こども園
 園長 山下 勝